

基底構造を活用した言語表現学習支援システムの実践

Practice of the Learning Aid System for Language Expressions activated by the Language Fundamental Structure

平澤 洋一 Yoichi HIRASAWA

城西大学
Josai University

西田 純也 Junya NISHIDA

摂南大学
Setsunan University

松永 公廣 Kimihiro MATSUNAGA

摂南大学
Setsunan University

要 旨

これまで公刊された表現学習関係の論文・著書は、抽象的・一般的な記述に終始するものがほとんどであった。また、実証的な事例と実践的なメニューが不十分であったため、具体的にどのような方法とプロセスで進めばいいか学習者が戸惑うことが多かった。それを改善し、教師の負担を軽くする「言語表現学習支援システム」を構築した。本稿では、(1) 実践による小論文の型、(2) 課題文のキーワードと抄録文・要約文の作成、(3) 基底構造の論理構造表と感得構造表にそれぞれ思考内容を配列、(4) それを総合化した小論文の生成、(5) 言語表現学習支援システムについて述べる。

Abstract

Papers or books published so far are mostly not as specific, but a bit too general in description. Further, as have been not well-provided with practical as well as empirical cases or programs in them, all too often, they have made the learners feel at a loss what approach or process they can take. In order to improve it, and what is more, to lighten the burden imposed on the instructor, the author has made a learning aid system for language expressions. In the present paper, the following points are discussed: (1) A model of a short essay by pretest, (2) To make a keyword to a set sentence and an extracted or summarized sentence, (3) To categorize individual thought contents into either logically- or affectively-based notions identified in LFS, (4) To form an essay on the basis of the preceding notional categorization, lastly (5) The Learning aid system for language expressions.

1. はじめに

これまで公刊された表現学習関係の著書・論文はかなりの数にのぼる⁽¹⁾が、学習者が表現法を身につけるための詳細な方法と段階的な手順を提示していない先行文献が多かった。高校の教科書⁽²⁾も同様である。したがって、いざ書こうとすると何を書いていいかわからない、文章作成の方法論を習っても消化しにくい、自分の文章のどこを採点されたのか理解できない、といった不安と不満を学習者が抱くことになる。その主な原因は、(1) 記述式の試験問題や期末レポートの掲示などで「日本語の音節について」「中国経済の現状について」のごときテーマの出し方が多かったこと、(2) 文章の要約や構成など言語表現法のすべての事項についての本格的な研究が国語学・言語学の分野では乏しかったことにある。

これに対し最近では、ビジネスの分野のみならず言語表現学習の分野においても、実践的で優れた研究が出始めた⁽³⁾。

本研究の目的は、上記(2)の事情を踏まえつつ、自己評価・

他者評価を活用した言語表現学習支援システムを Web 上に構築して、小論文の作成と評価を実践し、運用効果と問題点をフィードバックすることで、より質の高い支援システムにしていくことにある。本システムはすでに Web 上にアップロードし、本年4月より大学の授業の中で運用を継続している。表現学習は全26講からなる。本稿では前期前半6講分を中心に、システムの概要とコンテンツの紹介および運用の実態などについて述べる。

2. 本研究の基本方針

2.1 小論文のスムーズな作成を旨す

本研究がまず目指したのは作文よりも小論文である。鹿島茂(2005)は、作文と異なり論文に必要な不可欠なものは「問い」である⁽⁴⁾とし、その問いの立て方は、「一つは今までにたくさんの方が問題を立てながら未解決なところにもう一度問題を立てる論文。一つは、いまだかつて誰も問題を立てたことの無い

ところに問題を立てようとする論文。」⁽⁶⁾、この二つ以外にはないとする。

また、問いの見つけ方についても有効性の高い提案⁽⁶⁾をしている。

- (1) 問いは比較からしか生まれない。
- (2) 比較のフィールドを広げる。
- (3) 対象についての類似性と差異性を把握する。縦軸に移動する方法（歴史的方法）と横軸にずらす方法がある。
- (4) 未問の問いを見つけるには、一種独特の勘を働かせる必要がある。

この(3)は、言語学でいえば「通時的研究」と「共時的研究」の関係にあたるが、ある問題提起に対する答えを見つけようとするなら、相対立する解釈、対立する二つの学説、定説と新説というようなもの、音韻論でいう「最小対」に対応するようなものを比較・検討しつつ論理的・実証的な結論へと導く姿勢が欠かせない。そして、この「対立」「比較」という要素こそが、課題文を分析して小論文を作成していく過程で非常に重要な働きを担うことになる。具体的なことは、小論文の構成の節で詳述する。

3. 学習プロセスの特徴

「学習者に基底構造を理解させることができれば、システムの運用によって言語表現能力を伸ばせる」という仮説を立て、それを実現しようとするのが本表現学習支援システムである。基底構造とは、小論文を展開していく場合の基盤となる「論理的説得構造+情感的感得構造」をいい、そこには思考結果や感情が反映される。この基底構造の構成要素に順番の変更や表現技法の工夫などが加味されて表層構造が形成され、文章化が行われる。学習者が学んでいくプロセスに沿って本システムおよびコンテンツを見ていくことにする。

3.1 プリテストにみる小論文の展開型

当該年度に「言語表現法」関連の科目を履修する受講生は、全員が「プリテスト」を受ける。その目的は、

- (1) 学習者の言語表現能力の程度を教師が把握する。
- (2) どのような型の小論文を作成する学習者がどのくらいいるのかを、学期初めに教師が把握しておく。
- (3) 本格的に言語表現法を学び始める時点での学習者の表現の型と完成度を、教師と学習者の双方が正確に認識できる。
- (4) したがって、この1年にかなるシラバスでいかなるトレーニングを実施すべきかがはっきりする。
- (5) 学年末試験の時点で、各学習者がどこまでスキルアップしてくれたかを測定するための比較の基準点としたい。

という諸点を明確にすることにある。プリテスト課題文は、次のとおりである。

地球に住む私たちにとって、日々の生活の中で流れる時間は絶対的なものだと思われているが、宇宙から見た時、相対的なものであることがわかる。

球形の地球は、太陽が照らし出す明るい部分が昼で、蔭の暗

い部分が夜なのが、一目瞭然だ。地球上に住むすべての動植物には、この球の自転による昼夜の周期が1日になり、その繰り返し時間が時間の概念を生むのだろう。

(中略：スペースシャトルでの時間や距離などの紹介)

20世紀、人類は、宇宙から客観的に見ることで、地球が唯一生命を育む自然環境を持つ惑星であることを、実感した。

地球の自然環境は、科学技術の著しい進歩に伴って、巨視的に変化した。それとともに、環境ホルモンなどによる目に見えない変化が、急速に広がっている。さらに、分子レベルの遺伝子操作で、人間を含む生命そのものが、変化させられつつある。

巨視的、微視的な空間変化とともに、悠久から瞬間まで、さまざまな時間変化の中で、地球に生まれた生命は、環境変化に適応し、環境を変えながら、40億年、多様化し生き延びてきた。なかでも、人間は、ほかの生命体にはない科学技術を使い、生き延びようとしている。

科学技術が創った新しい環境の中で、いかにバランスよく生命を持続できるか。そこで求められるのは、地球が宇宙空間にある多くの惑星の一つであることを人間の目で捉えた視点、すなわち物事を絶対化せず、相対的に見る視点である。

「地球および宇宙をも視野に入れ、個人の立場をはっきりさせる強い意志、そして人間だけでなく生命全体の将来を考えるやさしさ」を21世紀のキーワードにしたい。(毛利衛「宇宙の視野での「やさしさ」」読売新聞 2001.1.5による)

この課題文では、「物事を絶対化せず、相対的に見る視点」の具体例を自分の経験の中から引き出して、相対化の重要性に言及することを求めたものである。

この文章でのキーワードは「宇宙」「視野」「やさしさ」「地球」の4語⁽⁷⁾であり、キーセンテンスは「地球に住む私たちにとって、日々の生活の中で流れる時間は絶対的なものだと思われているが、宇宙から見た時、相対的なものであることがわかる。」「地球の1年、日々の変化が90分間隔でやってくるため、21世紀の代わり目という時間は、船内にいる宇宙飛行士にとって、物理的、生物的にはそれほど意味を持たない。」「スペースシャトルや宇宙ステーションからは丸い地球が2000キロも見渡せる。」「20世紀、人類は、宇宙から客観的に見ることで、地球が唯一生命を育む自然環境を持つ惑星であることを、実感した。」「地球および宇宙をも視野に入れ、個人の立場をはっきりさせる強い意志、そして人間だけでなく生命全体の将来を考えるやさしさ」を21世紀のキーワードにしたい。」の5文である。

宇宙の視野での「やさしさ」をもって生命全体の将来を考え行動しようという筆者の提言に、あえて反論を唱える必要性がないので、小論文は課題文の提言と近似するテーマ・提言になりやすいが、ここは少しでも独自性と新規性をもたせたいところである。

この課題文に対する小論文を書くには、課題文のキーセンテンスに対置させた自己キーセンテンスを作成するとともに、それを活かすための作業を加えて文章を整えたり飾ったりすればいいわけであるが、学期初めに学習者に小論文を書いてもらったところ、4つの型があらわれた。

A型：対立型。課題文のキーワードとキーセンテンスを正確に捉えて課題文の主張と対立する提言を有し、新規性と説得性に富んだ小論文。構成や表記・表現技法も優れている。

B型：同内容型。課題文の主張を肯定しつつ自分なりの論拠や事例を入れてある。ただし、課題文との対置性がないので、論文末尾は課題文の結論を繰返すにとどまる。

C型：散漫型。課題文の主張を肯定して始まったものの、抽象的な表現に終始するだけ。実証例や調査データもない。論文末尾は課題文の結論を繰返すだけで尻切れトンボ。

D型：逸脱型。課題文の文脈から外れたことに気づかず、自分勝手な方向に飛び出していく。構成や表記にも問題点が多く、小論文の体をなさない。

もちろんA型が一番いい。一例を挙げれば、「文明」と「相対的」を自己キーワードにした上で「宇宙の視野での『やさしさ』をもって生命全体の将来を相対的に捉えて行動しようという筆者の提言に賛成である。」「しかし、宇宙の視野でやさしく相対的に捉えるべきものは、地球上の生命に限るものではない。」「人間が長年にわたり築き上げてきた物質文明や精神文明にも目を向け、これを相対的に見ながら質的に高めていきたい。」の3文をキーセンテンスにして小論文を作れば、A型（対立型）の小論文ができあがる。「問い」こそが「論文に必要不可欠なもの」とする鹿島 茂（2005）の指摘を忘れてはならないし、対立型の文章にしなければ、本文を越えて論理が発展することは望み薄となる。

もし教室内の全学習者がA型であるなら、第2講からは課題文のレベルを上げるとともに発想法・構成法・表現技法などの知識獲得と実践に注力すればよく、教師にとっては嬉しいクラスということになる。が、現実にはB～D型がかなり混じってくる。

B～D型は、「小論文とは何か？」が分かっていない学習者であるから、課題文の読み取り方から対置性・実証性・新規性などの意味づけと段階的な演習を必要とする。週1コマかつ短期間でスキルアップするには、講義だけでは無理であり、基本形である基底構造からスタートしてA型に近づいてもらうためのプロセスと方法論が要求されることになるが、その実現に貢献するのが本システムである。

3.2 A型を目指す学習プロセス

本システムでは、日本語表現法に関わる事項を、段階を踏んで学んでいく。前期の授業では具体的には、(1) → (15) のプロセスで展開していく。

- (1) プリテスト
- (2) 課題文のキーワードを抽出する。
- (3) 課題文から抄録文と要約文を作成する。
- (4) 課題文キーワードに対応させた自己キーワードを設定。
- (5) 論理型基底構造を理解する。
3段型構成、4段型構成、5段型構成、その他の構成。
- (6) 論理型基底構造（論理で説得する場合の論理構造）と感得型基底構造（気持ちで説得する場合の情感構造）の基本的な差異を学ぶ。
- (7) ハイブリッド型基底構造（論理型基底構造と感得型基

底構造の混合）表を作成する。

- (8) 素材や出来事・論拠などの選定と配列を再考する→それを踏まえてハイブリッド型基底構造表に入力されているコンテンツの順番を入れ換え、ハイブリッド型表層構造表を完成させる。
- (9) 最適な表現技法を選択して表層構造表に書き込む。
- (10) ハイブリッド型表層構造表を見ながら解答欄に文章を入力していく。
- (11) 入力し終わったら、自己小論文を対象にして「評価規準」表の各項目に点数を入れる。入れ終わったら送信する。
- (12) 他者の小論文を対象にして「評価規準」の各項目に点数を入れる。入れ終わったら送信する。
- (13) 個別学習者の送信時間がばらばらになるので、早く終了した学習者は、主な講の末尾に置かれた知識補完項目、例えば第5講なら「素材集めから構成まで」、第6講なら「小論文の書き方」、第7講では「文章の表現技法・1：文章をいかに光らせるか」を学んでいく。
- (14) 成績管理を行う。被験者は自分の成績を見ることができる。教師は学習者全員の成績一覧を見ることができる。
- (15) 当該授業の成績をもとに教師は次週の教授法と補助教材を考え、準備する。

上記プロセスにおいては、(1)～(7) および (13) には「知識学習」に、(8)～(10) には「対置・発想・構成・実証・説得という各項の再点検」に、(11)、(12) には「評価」に、(14) には「成績管理」という狙いがあるほか、各講には上に示したプロセスのいくつかが含まれる。

4. 教室作成から課題文分析へ

4.1 シラバスの確認

本システムで授業を展開する場合の準備→授業→評価までの流れは図1のようになる。年間シラバスは26講で構成されるが、そのクラスのプリテストの点数とタイプによって授業進度が決定される。

- 第1講：基本演習・プリテスト、その解説、文章の種類と目的、小論文採点基準、スキルアップ1
- 第2講：抄録文、要約文、キーワード、キーセンテンス、基本演習、応用演習、スキルアップ2
- 第3講：同内容表現と対立表現、抄録文、基本演習、応用演習
- 第4講：理系と文系の発表差、基底構造、3段型基底構造、4段型基底構造、5段型基底構造、基本演習、応用演習
- 第5講：同内容3段型、自己評価、他者評価、基本演習、応用演習、表現技法—素材から構成まで
- 第6講：対立3段型、自己評価、他者評価、基本演習、応用演習、小論文の書き方応用編
- 第7講：対立4段型1、基本演習、自己評価、他者評価、応用演習、文章の技法1
- 第8講：対立4段型2、基本演習、自己評価、他者評価、応用演習、文章の技法2

<第9講以下略>

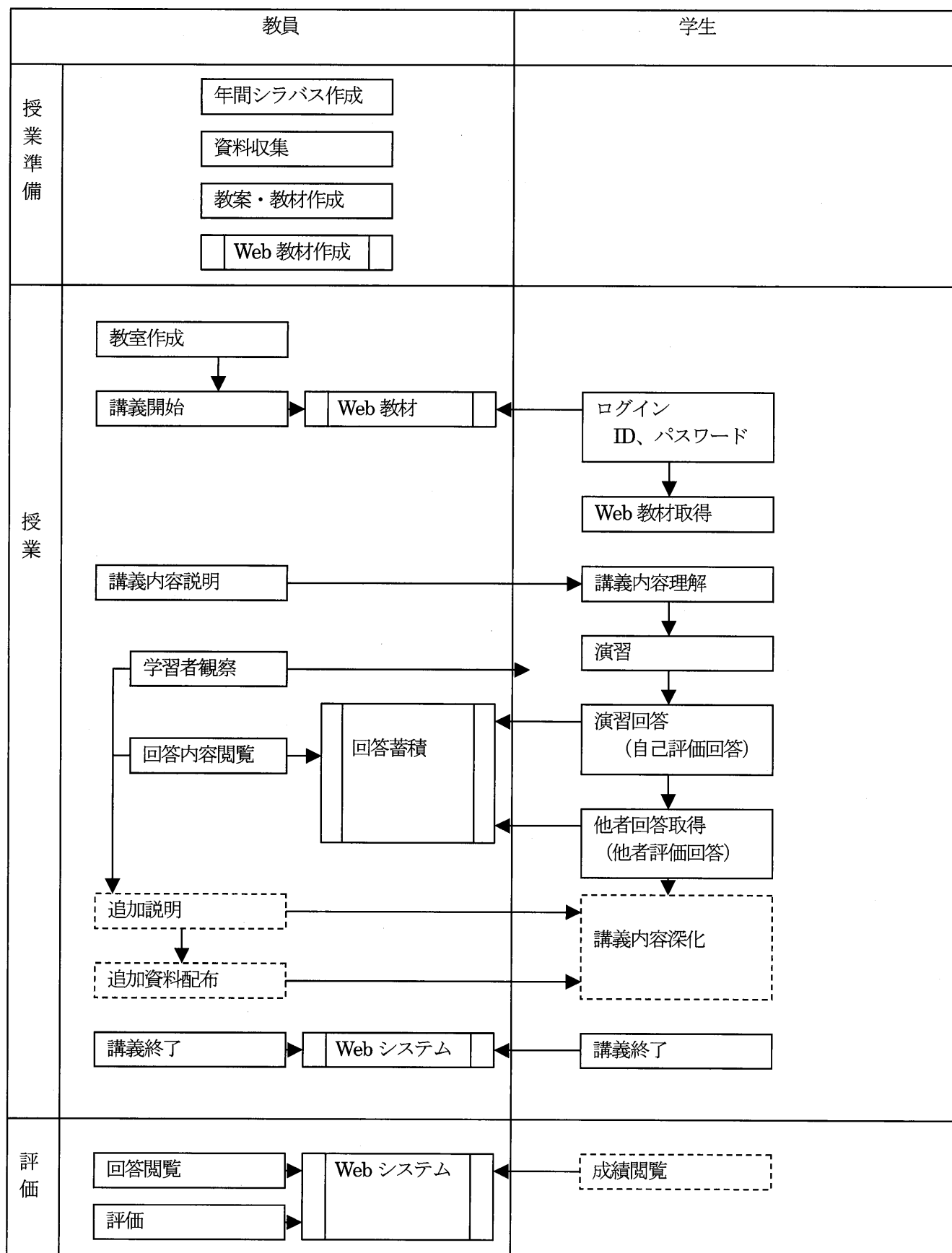


図1 授業準備から評価までの流れ

4.2 課題文キーワードの抽出

本節では第5講を例にして、課題文の分析から小論文の基底構造の設定、自己評価、他者評価、そして成績閲覧への流れを

述べていく。授業は、教師がログインして「教室作成」「講義開始」のボタンをクリックすると学生の授業参加が可能となる。学生はIDとパスワードでログインし、教材を獲得する(図1参照)。

表1 課題文に対するハイブリッド3段型基底構造

構成		働き	論理説得型の展開		働き	情感感得型の展開
序論	起	問題提起	先行学説の整理 本稿の立場と視点の明示 本稿で何を論じるのか	起	発端	
本論	承 転	論拠	問題となる事象の紹介 通説による解釈 新説の提示(新規性を強く訴える) その論拠/検証例	承 転	展開	光る叙情的な表現 感動性を高める
結論	結	提言	新説と論拠をまとめ、汎用性を強調する	結	余韻	

次に、教師が当該授業の内容と演習方法の説明を行い、理解できたところで課題文の演習に移る。第5講での課題文は、新聞のコラムからの引用文である。

「全世界が過去のぼろ着を脱ぎ、白い衣をつけたかのようだ」

1048年ごろ、ブルゴーニュの修道士ラウル・グラベールは当時のキリスト教の聖堂の変貌を、こう述べている。実際、11世紀初頭、村々の聖堂から都会の大聖堂、僻地の修道院までが、かつての木造から白い石材による、城壁のように堅牢な建物に改築され始めた。まさにロマネスク時代の大建築ブームの誕生である。

しかし、人びとの心まで“堅牢”になったわけではなかった。気候不順のとき、同じ地域で激痛と壊疽(えそ)をともなう難病「聖なる火」が発生。さらに「神の送った前兆」。「無数の悪霊が罪に落とそうと狙っている」(池上俊一「ロマネスク世界論」)と疑う不安と恐怖。

キリストの死から1000年後に、世界の終末が来るという絶望感や至福のユートピアが訪れるという「千年王国」への待望も強まる。こうして民衆の心の動揺は頂点に達し、ロマネスク聖堂の柱頭彫刻に、「ヨハネの黙示録」的な怪物や魔物が蠕動(ぜんどう)し始める。

さらに1000年後。いまや世界の多くの国々は、「白い衣」ならぬ電子レンジ、コンピュータ、携帯電話が出す電磁波の「透明の衣」に覆われている。幸い専門家の意見では、脳の近くで使う携帯電話も、とくに電磁波の悪影響はないという。しかし心への影響はどうであろうか。

最近の若者たちはコミュニケーションの手段として、媒体物に依存しすぎてはいないか。大教室での学生たちは机の下で、こっそり、友達と携帯電話でメールを交信することもあるらしい。「早朝までのバイトでチョー眠い」「お疲れー」といったたわいない内容。確かに、携帯電話の王国がいま誕生しつつある。だが実際に会って、心と心の親和力を強める機会がだんだん軽視されていくようだ。「透明の衣」をつけたわたしたちは、やがてどのような「不安と耐乏の構造」をもつことになるのであろうか。(森 洋子「『透明の衣』をつけた世界」『日本経済新聞』2000.1.8夕刊に

よる)

この課題文に対する設問は、計3問である。

問1 この文章のキーワードを入力しなさい。

問2 この課題文を読んで、考えたことを表1のハイブリッド3段型基底構造⁽⁸⁾に入力しなさい。

問3 上記の基底構造内の文章を添削しながら完成させ、完成したら別に定める指定枠内に小論文を入力しなさい(600字以内)。自己キーワードを忘れず盛り込むこと。

問1のキーワードは「世界」(頻度数5回)、「衣」(5回)、「白い衣」(2回)、「透明の衣」(3回)、「心」(5回)である。本システムでは、キーワードの認定は田中章夫(1983)の「主題語」⁽⁹⁾を参考にし、高頻度語句をキーワードとするが、認定基準を厳しくした(具体的な基準は次節で扱う)。

表1は問2に関わる自己小論文の思考段階のキーセンテンスないしはそれに準じる重要な文を入力させるためのものであり、この基底構造の意義については5.1基底構造における起承転結の意義とその展開で詳しく説明する。

4.3 抄録文を作る

本システムでは第1講から第3講の終わりまでの間に抄録文・要約文の作成を徹底的に訓練する。要約文の作成方法を説く先行文献は多いが、いわゆる名人芸のやり方である。いつでも誰にでもできるというスキル・方法とは言いがたい。真面目に学習する者なら誰でも正確な抄録文・要約文が生成できる方法が望ましい。本システムでは、次の各項を認定基準とした。

(1) キーワードの認定

a タイトルの中の名詞、またはb頻度数5回以上で使われる語句。ただしc田中章夫(1983)のいう「特徴語」(私、我々、助詞、助動詞類)を除く。

(2) キーセンテンスの認定

a キーワードを含む文をキーセンテンスの候補とする、b その文に指示語がある時は指示内容を代入する、c 次のどれかに抵触する文は候補から削除する。

- ・前置きを示す段落内の文
- ・具体例を示す文
- ・引用の中の文

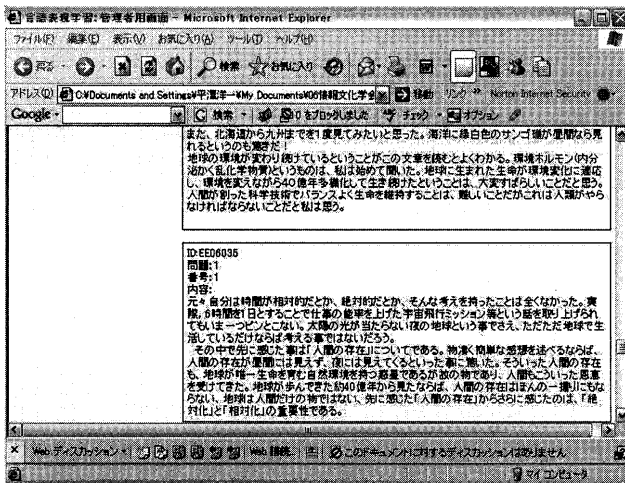


図2 プリテスト小論文入力画面例

表2 4段型基底構造

構成	働き	論理説得型の展開
序論	起	問題提起 先行学説の整理 本稿の立場と視点の明示 本稿で何を論じるのか
	承	問題となる事象の紹介と通説による解釈 新説の提示 (新規性を強く訴える) その論拠/検証例
本論	承	問題となる事象の紹介と通説による解釈 新説の提示 (新規性を強く訴える) その論拠/検証例
	転	新説の提示 (新規性を強く訴える) その論拠/検証例
結論	結	提言 新説と論拠をまとめ、汎用性を強調する

表3 第5講課題文に適用した場合の基底構造

構成	働き	論理説得型の展開
序論	起	問題提起 池上俊一「ロマネスク世界論」 「全世界が過去のぼろ着を脱ぎ、白い衣をつけたかのようだ」 世界の変貌と人の心
	承	具体例 教会がいっせいに「白い衣」をつけた。 しかし、人びとの心まで「堅牢」になっただけではなかった。 人々不安と恐怖に襲われ、「千年王国」への待望も強まった。
本論	承	具体例 教会がいっせいに「白い衣」をつけた。 しかし、人びとの心まで「堅牢」になっただけではなかった。 人々不安と恐怖に襲われ、「千年王国」への待望も強まった。
	転	論拠 いま世界は「透明の衣」に覆われている。 心と心の親和力を強める機会がだんだん軽視されている。
結論	結	提言 やがてどのような「不安と待望の構造」をもつことになるのか。

- ・単に事情説明をしているに過ぎない段落の中の文
- ・繰り返し文の2回目以降の文
- ・言い換えられた元の文
- ・文章の末尾に補足的に追加された色彩の強い段落内の文

これらの条件をクリアした文の中から、次の文を抽出してキーセンテンスとする。

- (a) キーワード初出文
 - (b) キーワードの最多出文
 - (c) 最後のキーワードが出てくる文
- (3) 抄録文を作る
上記(a)~(c)の文から応答詞・感動詞・接続詞等を削除し、指示語がある場合は指示する内容を代入する(1文にまとめることはしない)。
- (4) 主題文を作る
抄録文のすべての文をつなげ、必ず1文にまとめる。
- (5) 要約文を作る
抄録文の接続語等を削除して読みやすくし、必要なことを加えて作成する(1文にまとめることはしない)。

このような基準を適用すると、プリテスト課題文の抄録文は、こうなる。

- 抄録文
- (1) 全世界が過去のぼろ着を脱ぎ、白い衣をつけたかのようだ。
 - (2) いまや世界の多くの国々は、「白い衣」ならぬ電子レンジ、コンピュータ、携帯電話が出す電磁波の「透明の衣」に覆われている。
 - (3) 「透明の衣」をつけたわたしたちは、やがてどのような「不安と待望の構造」をもつことになるのであろうか。

5. 小論文の基底構造

5.1 基底構造における起承転結の意義とその展開

基底構造における起承転結の意義については、片方善治(1973)が発表した論文「創造性開発技法」⁽¹⁰⁾によっている。この論文では思考の起承転結としての「起」はプリ・クリエイティビティ、「承」はパーソナル・データ、「転」はグループ・データ、「結」はポスト・クリエイティビティの意義をもつ。これら4要素の展開は「ZK法の展開」として紹介されているが、本論文での基底構造はこの考え方(創造性開発技法)を踏まえて構成した。

ただし、表2の4段型基底構造の「転」など、第4講~14講においては、パーソナル・データを中心に扱うため、教師が集団による創造的思考の有効性を説く程度にとどめ、本格的な集団思考の実践は後期授業の第15講以降で行うことになる。

5.2 基底構造の構成

第5講の基底構造では、課題文を目の前にした学習者が、混乱してはくらずに時間を空費しないよう、課題文が4段型で構成されていることに気づかせることを目的とする(この基礎訓練は第4講で済ませてある)。

4段型の課題文に対して「問い」は自己小論文は同内容3段型で展開するわけだから、まず課題文のキーセンテンスをコピーして4段型基底構造に入れ、(2)それに対する自己小論文のキーセンテンスを3段型基底構造に入力していけばいい。

表4 評価のチェックポイント

	小項目	点数
A	読解力 (5×3=15点)	
1	課題を正確に捉えているか?	
2	論旨を小論文に活かしているか?	
3	キーワードを正確に捉えているか?	
B	対置力 (5×2=10点)	
1	本文の主張に対する「賛否」が明確か?	
2	自己の視座が明確に表示されているか?	
C	発想力 (5×2=10点)	
1	発想は新鮮か?	
2	発想は優れているか?	
D	構成力 (3×5=15点)	
1	問題提起をしているか?	
2	論の展開は適切であるか?	
3	制限字数が守られているか?	
4	段落数は適切であるか?	
5	引用が2割以内におさえられているか?	
E	説得力 (4×5=20点)	
1	提案が論理的で分かりやすいか?	
2	内容が本文を上回っているか?	
3	内容が具体的で説得力があるか?	
4	反論に備えているか?	
5	心を動かされ共感させられたか?	
F	実証力 (減点5×2=10点)	
1	実証力のある素材や資料を使っているか?	
2	教養や生活経験が表現されているか?	
G	表現未熟 (減点2×4=8点)	
1	主述のねじれがある。	
2	不適切な語彙がある。	
3	表現にパンチ力がない。	
4	文体に「です」体と「だ」体の混同がある。	
H	表記ミス (減点2=10点, 1項目2点減点)	
1	仮名づかいに誤りがある。	
2	漢字が間違っていないか?	
3	句読点が適切であるか?	
4	記号・符号が正しく使われているか?	
5	「事」「為」が平仮名書きになっているか?	

自己論文の基底構造は、「同内容型」の小論文をつくる場合には、本文を肯定する論脈とする。したがって自己キーワードも本文のキーワードと類似したものとなる。

4段型基底構造を表2に、それをプリテストの課題文に適用した場合の基底構造を表3に示す(いずれも論理説得型の枠のみを示す)。5段型の基底構造もこれに準じる構成となる。

6. 小論文の評価

6.1 評価規準

作成した小論文に対する評価は、表4の基準で行われる。が、最初から全項目にわたるチェックは無理なので、第5講から12講まで、段階に分けて少しずつ実施していく。

6.2 自己評価

自分の小論文がどのようなところでチェックされ評価されるのかを知ることができ、その結果を知ることによって、次回からの気配りが違ってくる。課題文を読んで「考えたこと」「感じたこと」をそのまま書けば小論文になる、という学習者の思い込みを払拭させ、基底構造の枠内に自己キーセンテンスを貼りつけていく作業をとることで、「大外れな小論文」を未然に排除するのが、自己評価の目的である。

6.3 他者評価

送信した自己小論文は当該授業時間中に複数の他者に採点されて返信されてくるので、他者の目を通して自己小論文がどのように評価されたのかを明確に知らされることになる。そして、学習者は同じ授業時間中に大きな期待と不安を抱かされることになるので、教室内で授業と無関係な私語が教師の耳に届くことはなかった。

7. 言語表現学習支援システム

7.1 システムの機能

本システムは、本年4月から大学の授業で実践的運用を開始した。受講生はA大学1年生18名、B大学2年生46名。これと並行してC大学では書画カメラ・プリント教材および黒板で授業を進め、前期末と学年末で教育効果を比較することにした(受講生80名)。

システムによる授業展開は、次のような手順で行う。大枠として各講は、

- (1) 本講で学ぶこと、その方法
- (2) 基本演習
- (3) 基本演習の解答と解説
- (4) 応用演習
- (5) 応用演習の解答と解説
- (6) 発展：より高度な方法論

という画面構成となっているので、(1)で当該授業の狙いと方法を説明した後、学習者各自で(2)の基本演習をこなす。(2)では教師がサポートすることもある。頃合いを見て(3)を実施し、(4)では教師からの支援はない。(6)は早く終了してWeb送信した学習者用の発展学習用教材である。

学習者への出題数については、学習者が短時間で演習問題を処理できる講においては基本演習と応用演習の2題とするが、学習者の負担が重い講においては、作業時間を考慮して出題は基本演習のみの1題とした。

8. おわりに

本稿で取り上げた表現学習支援システムは、本年4月よりA、Bの2大学で運用を開始したが、運用効果は当初予想していたより大きかった。

- (1) システムを運用した2大学では、遅刻・早退・欠席者がほとんどでなかった。競争心と集中度が高い。しかし、同じ教材をプリントと書画カメラを用いて授業を行ったC大学では6月上旬は出席者が6割程度にまで落ち込んだ。
- (2) A、Bの大学では、回答の履歴が残ることをいい意味での刺激とし、授業ごとの狙いをよく理解しようと努めるようになった。C大学では、授業が回を追うごとに、学習者の集中力が失せていった。
- (3) 教材のプリントおよび小論文の採点に費やす教師の負担が大幅に軽減されることにより、当該授業のコスト・パフォーマンスが改善された。
- (4) 学習者は、自分の小論文のどこで得点・減点されるかが分かるだけでなく他者による評価を受けるので、文章の構成や表現技法の選択に気を配るといった習慣を身につけた。
- (5) 教員は板書と採点から開放されるので、机間移動によって個々の学習者の理解度や進捗を知り、授業の進行を妨げることなく個別の質問に答えることができるようになった。

この一方で、デメリットも無視できない。

- (a) 教科書やプリント教材に比べ、システムではコンテンツの用意に時間がかかる。
- (b) システムの説明や扱いに時間がとられる。最初の1、2回は学習者のオペレーション・ミスに振り回されることもあり、教師に過重負担がかかる。この点はアシスタントの手をかりることで解消する。

ただし、授業全体としては学習支援システムを活用した場合の興味深い事象が見え始めている。その状況を、回答分析、学習者の観察、アンケート、インタビューなどから総合的に検討することによって、上記の事象を説明できるものと期待される。この実践を継続するために、Web教材の作成を容易化するWeb教材作成支援システムが必要となる。これらは後期に向けての緊急の課題である。

注

- (1) 平井昌夫：文章表現法，至文堂，(1969).
金田一春彦：日本人の言語表現，講談社，(1975).
森岡健二：文章構成法，至文堂，(1976).
樺島忠夫・佐竹秀雄：新文章工学，三省堂，(1978).
安本美典：説得の文章技術，講談社，(1983).
安本美典編著：国語表現，建帛社，(1988).
飛田良文編著：日本語文章表現法，白帝社，(1997).
高橋昭男：仕事文の書き方，岩波書店，(1997).
大阪工業大学言語表現技術研究会：言語表現技術ハンドブック，晃洋書房，(2005).
野口尚史，森口稔：日本語を書くトレーニング，ひつじ書房，(2003).
荒木昌子，稲田照子，尾関桂子，大道卓，山本薫，口語表現ワークブック，実教出版，(2004).
大島弥生，池田玲子，大場理恵子，加納なおみ，高橋淑郎，岩田夏穂：ピアで学ぶ大学生の日本語表現，ひつじ書房，(2005).
- (2) 高等学校国語科用 新訂 国語二，第一学習社，(2002)
- (3) 木下是雄：理科系の作文技術，中央公論社，(1981).
中島利勝・塚本真也：知的な科学・技術文章の書き方，コロナ社，(1996).
Marilyn F.Moriarty (長野 敬訳)：「考える」科学文章の書き方，朝倉書店，(2000).
学習技術研究会：知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—，くろしお出版，(2002).
三森ゆりか：外国語を見につけるための日本語レッスン，白水社，(2003).
- (4) 鹿島 茂：勝つための論文の書き方，p24，文芸春秋，(2005).
- (5) 同書 p40
- (6) 同書 pp42-71
- (7) キーワードとキーセンテンスの抽出方法については、「4. 課題文の分析」で詳述する。
- (8) 学習者は表1のハイブリッド3段型基底構造を参考にしながら、入力用の基底構造に入力する。ハイブリッド型というのは、「論理説得型」の展開の中に「情感感得型」の展開の一部を織り込む混合型の展開をいう。
- (9) 田中章夫：抄録のための言語処理，運用Ⅱ・人文系研究のための言語データ処理入門，朝倉書店，1983年。この論文は水谷静夫「抄録を作る機械」(『言語生活』137号、1963)を引用しながら、キーワード密度による抄録法を説く。
- (10) 片方善治：解説 創造性開発技法，電子通信学会誌，56巻6号，pp802-808，(1973).